

# 20世紀初頭フランスにおける変造葡萄酒問題

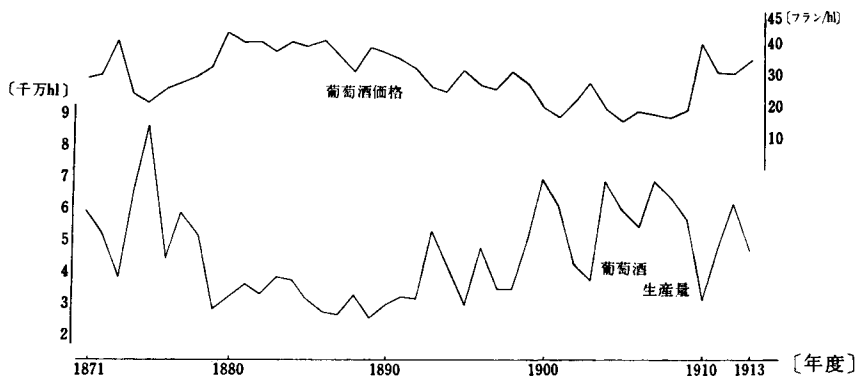
柳

敦

## 1. 序

フランスの葡萄栽培は、19世紀末に、ねあぶらむし (phylloxéra) の流行により大きな被害を受けた。葡萄酒生産量は、図1に示されているように、1870年代後半から1890年代初頭にかけてかなり低い水準となった。ねあぶらむしにより壊滅した葡萄栽培地は、ねあぶらむしに抵抗力のあるアメリカ産の苗の導入を中心とする対策<sup>(1)</sup>が効を奏し、しだいに再建されていったが、この間の葡萄酒不足は輸入葡萄酒と変造葡萄酒とにより補われていた。再建が進み、生産量が回復すると、葡萄酒価格は下落を始めた。図1には葡萄酒価格の推移が示されているが、1890—9年に1 hl あたり平均28.8フランであった価格は、1900—9年には18.6フランにまで下落した。<sup>(2)</sup> この下落には、生産量の増加の他に

図1 葡萄酒生産量と価格



出所：Ministère du commerce, Statistique générale de la France ;  
Annuaire statistique, 1914-5, Paris, p. 44\*.

様々な原因があるが、その一つは、ねあぶらむしにより被害を受けていた時期に容認されていた変造葡萄酒であった。特に、南部の葡萄栽培者は、変造葡萄酒を価格の下落の第一の原因と考え、変造葡萄酒に対する規制を強く求めた。<sup>(3)</sup> 彼らは、1907年に、変造葡萄酒に対する規制の強化を求めて各地で集会を行なったが、それは死者を出す程の騒擾にまで発展した。<sup>(4)</sup>

以下では、葡萄栽培地の再建が進展していく中で変造葡萄酒の抑制のためになされた様々な規制について考察していきたいと思う。

## 2. 変造葡萄酒に対する規制

ねあぶらむしの流行により葡萄酒が不足していた時期には、様々な形での変造葡萄酒生産が行なわれていた。すなわち、乾し葡萄からの葡萄酒生産、アルコール添加、水増し、加糖等によるものである。

### a) 乾し葡萄からの葡萄酒

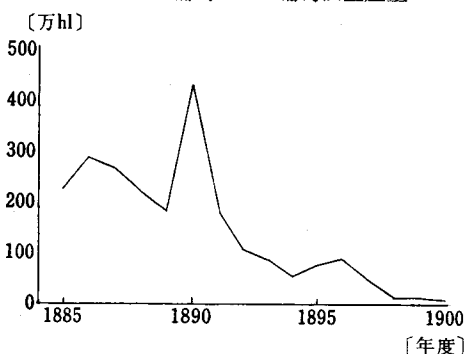
乾し葡萄からの葡萄酒生産<sup>(5)</sup>は、ねあぶらむしによって葡萄酒生産量が減少すると、大きく拡大した。表1には乾し葡萄の輸入額が示されているが、1870年代末に大きな増加がみられる。また、図2には乾し葡萄からの葡萄酒生産量の推移が示されているが、1880年代の後半には、自然葡萄酒生産量の約10%ほど

表1 乾し葡萄輸入額[万フラン]

年 度	輸 入 額
1874	840
1875	570
1876	540
1877	860
1878	1,480
1879	4,080
1880	6,260

出所：Fournier de Flaix, E., “Le congrès phylloxérique de Bordeaux,” *L'économiste français*, 24 septembre, 1881, p. 384.

図2 乾し葡萄からの葡萄酒生産量



出所：Ministère de l'agriculture, *Bulletin mensuel de l'office de renseignements agricoles*, 13<sup>e</sup> année, n° 4, 1914, p. 464.

の量が生産されていた。しかし、しだいに乾し葡萄価格が上昇し、他方、葡萄酒価格は下落を始め、乾し葡萄からの葡萄酒生産は採算のあわないものとなっていった。1890年には、乾し葡萄からの葡萄酒生産に対し特別な税が課され、<sup>(6)</sup> さらに、乾し葡萄に対する関税が1892年及び1894年に引き上げられた。こうして乾し葡萄からの葡萄酒生産は90年代に衰退していったのである。(図2参照)。

#### **b) アルコール添加 (vinage)**

葡萄酒にアルコールを加えるだけならば、それによって増加する量はわずかであるが、アルコールを添加された葡萄酒は再び水でうすめられて販売された。しかし、当時のアルコール消費税が高く、この行為は葡萄酒価格が高騰していた時期にある程度行なわれたにすぎなかった。また、不正な手段により入手したアルコールを添加することも行なわれていたが、その量はわずかであった。<sup>(7)</sup> このように、国内でのアルコール添加は限られたものであり、後述する1889年及び1894年の法律による規制を待つまでもなかった。

ところが、輸入葡萄酒においてアルコール添加が問題となった。フランスは、葡萄酒不足を輸入葡萄酒によって補うために、1881年の関税改正にあたって葡萄酒関税を引き下げた。<sup>(8)</sup> このため、主にスペインとイタリーから、大量の葡萄酒が輸入された。こうしたスペインやイタリーの葡萄酒は、アルコール添加によってアルコール含有度を関税法の限界である14.9度にまで高められた後に、フランスに向けて輸出された。<sup>(9)</sup> 特に、スペインは、馬鈴薯からつくられた安価なアルコールをドイツから輸入し、それをフランス向けの葡萄酒に添加していた。<sup>(10)</sup> また、フランス国内でのアルコール添加は採算にあわないため、スペインに向けてフランスの葡萄酒を輸出し、アルコールを加えられた後に再輸入することさえ行なわれていた。<sup>(11)</sup> こうしたアルコールを添加された輸入葡萄酒を排除するために、1892年の関税改正において葡萄酒関税は引き上げられ、アルコール含有度の上限も11度に引き下げられた。<sup>(12)</sup> この結果、アルコールを添加された葡萄酒の輸入は採算のあわないものとなり、そうした葡萄酒の輸入は行なわれなくなった。

#### **c) 水増し (mouillage)**

葡萄酒を水でうすめることは容易であり、生産者、卸商あるいは小売商のいずれの段階においても可能である。一般に、生産者から卸商へそして卸商から小売商へ葡萄酒を販売する際には、葡萄酒価格は、単に量だけでなくアルコール含有度に基づいて定められた。<sup>103</sup> したがって、生産者や卸商の下で水増しが行なわれることは少なかった。<sup>104</sup> 他方、小売商から消費者への販売においては、アルコール含有度をごまかすことは容易であり、アルコール添加や後述する加糖によってアルコール含有度を高められている葡萄酒だけでなく、自然葡萄酒に対しても、頻繁に水増しが行なわれた。

こうした不正行為に対し、議会は、1889年8月14日の法律により、「葡萄酒」とは「生葡萄の醸酵の産物」と定め、<sup>105</sup> 水でうすめられた葡萄酒も含めすべての変造葡萄酒を「葡萄酒」<sup>106</sup> として販売することを禁じた。この法律は、これ以後の変造葡萄酒に対する様々な規制の母胎となるが、実際には全く効果を持たなかった。この法律のために変造葡萄酒生産をやめた者もいなければ、この法律に基づき、変造葡萄酒の調査あるいは監督を政府が積極的に行なったわけでもなかった。さらに、1894年には、水増しされた葡萄酒の販売が禁じられ、税収吏が立入り検査を行なうこととなった。<sup>107</sup> しかし、この法律に対して都市の小売商から非難が集中し、1900年には、小売商を変造酒検査から除外する法律が制定された。<sup>108</sup> これにより、小売商の下での水増しの規制は事実上不可能となったのである。

水増しにより果してどの程度の量が増やされたかについて、具体的な数値は明らかではないが、水増しが行なわれていたと推測できる例はある。1902年にパリでの葡萄酒価格は1 hl あたり12.50フランであったが、当時、諸経費と税負担をあわせると1 hl につき約12フランかかると言われていた。<sup>109</sup> 利潤を0としても、小売商は、1 hl あたり0.5フランの葡萄酒を仕入れてこななければならないこととなる。費用と税の総計12フランという額は少し大きいかもしれないが、そうであっても、水増しせずには12.50フランでの販売は不可能である。また、たとえ水増しを行なっていることが露見しても、アルコール消費税の支払いを命じられるにすぎず、他に罰金等を課せられるわけではなかった。<sup>110</sup>

以上のように、水増しに対する十分な規制は行なわれず、特に小売商の下での水増しは放任されたままであった。

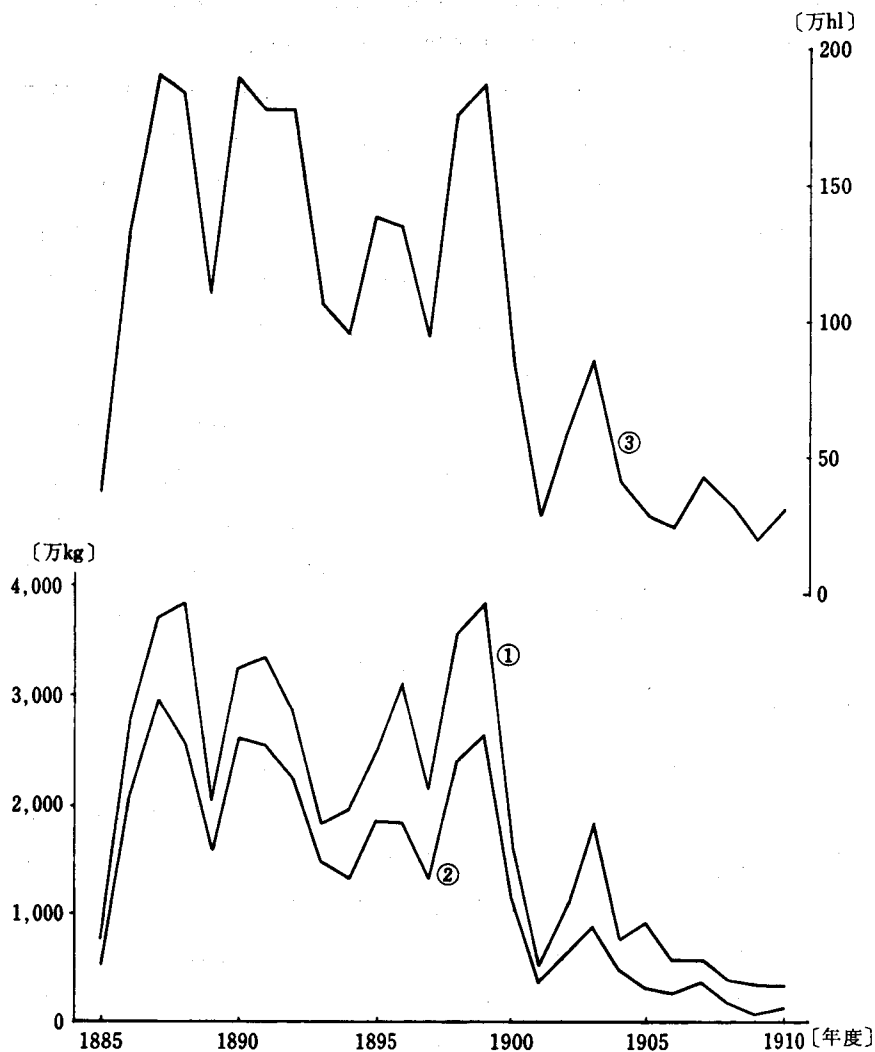
#### d) 加糖 (sucrage)

加糖とは、葡萄酒醸造の際に砂糖を加え、それをアルコールに変える行為である。この行為は二つの方法で利用されていた。すなわち、アルコール含有度を引き上げるために醸造前の葡萄液に砂糖を加える方法（第一回醸造分への加糖）<sup>23)</sup>と、一度使用した葡萄のしぼりかすに砂糖、水そして自然葡萄酒に含まれる若干の成分を加えて葡萄酒をつくり出す方法（第二回醸造分への加糖）<sup>24)</sup>である。ねあぶらむしの流行以前においては、第一回醸造分への加糖はアルコール含有度の低い葡萄酒しかつukれない地方で行なわれていたものであり、第二回醸造分への加糖も自家消費用の葡萄酒生産のために行なわれていたにすぎなかった。しかし、葡萄酒不足の時期には、加糖を受けた葡萄酒がほとんどの地方で生産され、市場に供給されていた。一部では、しぼりかすを三、四回も用いて加糖が行なわれていた。政府も、葡萄酒不足の緩和のために、加糖用の砂糖に対し優遇処置を講じた。1884年7月29日の法律により、それまで100 kgあたり40フランであった砂糖消費税が、一般の砂糖に対して60フラン、加糖用の砂糖に対して24フランと定められたのである。<sup>25)</sup>

翌1885年には、この優遇処置の下で加糖用として購入できる砂糖の最大量が、第一回醸造分への加糖の場合には葡萄收穫量3 hlにつき20 kg、第二回醸造分への加糖の場合には同50 kgと定められた。<sup>26)</sup>しかし、この最大量を用いると、3 hlの葡萄收穫量からつくられる2 hlの葡萄酒のアルコール度を約6度引き上げることが可能であり、また、そのしぼりかすから、9～10度のアルコール含有度をもつ3 hlの葡萄酒をつくることができる。<sup>27)</sup>したがって、葡萄酒価格が高い時期には、加糖は非常に大きな利益をもたらした。

加糖の利用は、こうした優遇処置により、急速に広まっていった。図3は加糖用の砂糖消費量の推移を示しているが、1890年代末まで大量の砂糖が利用されていたことがわかる。特に第二回醸造分への加糖は頻繁に行なわれ、図3の③が示すように、1894年と1897年を除き、第二回醸造分への加糖により100万

図 3 加糖用の砂糖消費量としぼりかすへの加糖により生産された葡萄酒量



- ① 加糖用の砂糖消費量
- ② 第2回醸造分への加糖に用いられた砂糖の量
- ③ 第2回醸造分への加糖により生産された葡萄酒量

出所：Ministère de l'agriculture, *Bulletin mensuel de l'office de renseignements agricoles*, 13<sup>e</sup> année, n° 4, 1914, pp. 462-3.

hl 以上の葡萄酒が生産されていた。<sup>84</sup>

しかし、葡萄栽培地の再建が進み、葡萄酒価格が下落を始めると、加糖に対する非難が起り始め、しだいに規制が強化されていった。

先に述べた1889年の法律は加糖に対しほとんど効果を持たなかった。1891年には、1889年の法律を補足するために、砂糖を加えるにせよ加えないにせよ、しぼりかすからつくられた葡萄酒を「葡萄酒」として販売することが禁じられた。<sup>85</sup> こうした1889年と1891年の法律は、しぼりかすからつくられた葡萄酒を「葡萄酒」という名の下に販売することを禁じたにすぎず、そうした葡萄酒の生産や販売が禁じられたわけではなかった。しかも、第一回醸造分への加糖を受けた葡萄酒は「葡萄酒」に含まれると考えられていた。<sup>86</sup>

1897年には、しぼりかすからつくられた葡萄酒の販売を禁じる法律が制定された。<sup>87</sup> さらに、1900年12月29日の法律により、加糖用として購入できる砂糖の量が、家族及び奉公人一人あたり40 kgと定められた。<sup>88</sup> 1897年の法律は、第二回醸造分への加糖による葡萄酒生産を自家消費用のみに限ったわけであるが、罰則を持たず、大きな効果を及ぼすことはできなかった。これに対し、1900年の法律は、一経営が購入できる砂糖の量をかなり制限し、ある程度の効果を有していた。<sup>89</sup>

しかし、1903年に、これまでの一連の規制を全く効果のないものにする事態が生じた。1903年1月28日の法律により、一般の砂糖への消費税が加糖用の砂糖への消費税と等しい額にまで引き下げられたのであった。<sup>90</sup> この法律は加糖に利用できる砂糖の量を制限する条項を有していたが、<sup>91</sup> 実際にはその条項は全く意味を持たなかった。というのも加糖用と申告しなければ、砂糖をいくらでも購入できたのである。このため、加糖用の砂糖としての制限を超えた量の砂糖が利用されることとなってしまった。<sup>92</sup>

議会は、こうした事態を重視し、1905年に委員会を設置して新しい変造葡萄酒規制法の検討を行なった。そして、1905年8月6日には、変造葡萄酒に対する新しい法律が制定された。この法律は、それまでになされた加糖に対する規制を再確認するとともに、砂糖に関連した職業に従事している者に対する場合

を除き、50 kg 以上の砂糖の販売と輸送を許可制とした。<sup>88</sup> この1905年の法律は、違反行為に対する罰則を持ち、この点で、これまでの一連の法律から一歩進んだものと考えてよいだろう。

1907年には、南部で発生した騒擾に対処すべく、より厳しい規制が検討された。「打倒変造酒!」をスローガンとする<sup>89</sup>南部の葡萄栽培者そしてその代表である南部の議員は、加糖を全面的に禁止することを求めている。しかし、製糖業者はもちろんのこと、第一回醸造分への加糖を必要とする地方の葡萄栽培者<sup>90</sup>や北部の甜菜栽培者は、全面的な禁止に強く反対した。<sup>91</sup>

結局、全面的な禁止とまではいかないが、かなり厳しい法律が制定された。<sup>92</sup> その内容は次のようなものであった。葡萄栽培者は、収穫時に、栽培面積、葡萄酒生産量及び収穫の前から酒倉に貯蔵されている葡萄酒の量等を、市町村長に申告せねばならない（第一条）。加糖に利用される砂糖には、100 kg あたり40フランの付加税が課せられる（第五条）。自家消費用の葡萄酒生産に利用できる砂糖の量は、家族及び奉公人一人あたり20 kg あるいは収穫された葡萄3 hl につき20 kg を超えてはならず、一経営につき200 kg を超えてはならない（第六条）。25 kg 以上の砂糖の販売は許可を必要とする（第八条）。

このように、1907年の法律は、変造行為を抑制するために毎年の収穫量の申告を義務づけ、特に砂糖については、その使用可能量をかなり制限した。また、1905年の法律と同様に、この法律は違反行為に対する罰則を有していた。

こうした1905年と1907年の法律は加糖に対して大きな影響を及ぼし、加糖のための砂糖消費量は減少していった（前掲図3参照）。

### 3. 結 び

以上のように、ねあぶらむしの流行期に拡大した変造葡萄酒生産の中で、乾し葡萄からの葡萄酒生産とアルコール添加は1890年代に抑制されたが、水増しと加糖は十分な規制をなされることなく20世紀初頭まで続けられた。1907年の法律により、第一次大戦前における変造葡萄酒への規制はほぼ完了したが、依然としていくつかの問題を残した。最後に、そうした問題の中で最も重要な二



点を指摘して本稿を終わりたいと思う。

前述のように、1907年の法律は罰則の規定を有する厳しい法律であったが、この法律の施行にあたって問題が生じた。すなわち、誰が変造葡萄酒の検査・監督を行なうのかという問題である。1903年の法律以前においては、変造酒問題は税制上の問題として扱われており、したがって、税収吏がそうした任務にあたることとなっていた。<sup>60</sup> しかし、砂糖に対する税制上の優遇処置が廃止されると、こうした任務は税収吏の手を離れた。1905年の法律とほぼ同時期に制定された1905年8月1日の法律は、変造酒調査のための特別な調査官の任命を可能にしたが、現実にはそうした任務は警察や地方公共団体に任されていた。しかも、警察や地方公共団体にとっては、変造酒調査は二次的な仕事でしかなく、多くの場合に重い負担と考えられていた。<sup>61</sup> 1907年の法律制定後においてもこうした状況は変わらなかったが、注目すべき点が一つある。1907年の法律は、その第九条においてこうした任務を農業組合に認めたのであった。これに基づき、南部の騒擾後につくられた南部葡萄栽培者総同盟 (*Confédération général des vignerons du Midi*) は、自ら調査を行ない、数多くの不正行為を摘発した。<sup>62</sup> この成功は、他の葡萄栽培地域においても、同様の活動を引き起こした。<sup>63</sup> このように、変造酒調査は葡萄栽培者の側から活発に行なわれたが、民間団体による調査には数多くの制約があり、強力な権限を有する政府機関が設置されない限り、1907年の法律が完全に遵守されることは望めなかったと言えよう。

また、水増しの問題は残されたままであった。1907年の法律により栽培者が生産量の申告を義務づけられたことは、栽培者の下での水増しに対し効果を及ぼすが、小売商の下での水増しを抑制するには至らなかった。しかも、上述の栽培者から成る団体が変造酒検査を行なおうとしても、小売商に対しそうした検査を行なうことは全く不可能であった。

以上のように、1907年の法律は、変造酒調査を専門に行なう機関の欠如と小売商の下での水増しの放任という二つの問題を残した。しかし、1907年の法律は、加糖に対する規制としては十分効果を持つものであり、その後いくつかの

改正や補足を受けながらも、現在にまで至っている。また、以上のような経過である程度変造葡萄酒の問題が解決されると、次に原産地を詐称した偽造葡萄酒が問題となったが、本稿ではその問題を取り扱わない。

注(1) ねあぶらむしに対する対策としては、他に硫化物撒布や冠水も行なわれた。

(2) 図1の数値から筆者が計算したもの。

(3) 実際に、後述する規制の多くは、南部の葡萄栽培者の要請によるところが大きい。

(4) 6月9日のモンペリエ (Montpellier) での集会には、50万人もの参加者があった (Bonnaud, Paul, “La crise de la viticulture,” *Journal des économistes*, t. XVI, octobre, 1907, p. 47)。

(5) 100 kg の乾し葡萄から、3~5 hl の葡萄酒がつくられる (Gide, Charles, “La question des vins au point de vue des traités de commerce,” *Revue d'économie politique*, t. VII, 1892, p. 821)。

(6) Arnauné, Auguste, *Le commerce extérieur et les tarifs de douane*, Paris, 1911, pp. 311-3. この処置に対抗して、乾し葡萄からの葡萄酒生産者は組合を設立し、結束を固めた。このため、図2に示されているように、1890年の乾し葡萄からの葡萄酒生産量は急増した (Laurent, Robert, *Les vignerons de la “Côte d'Or” au XIX<sup>e</sup> siècle*, Paris, 1957, p. 391)。

(7) 輸出用の葡萄酒には、輸送中の変質を防ぐためにアルコールが加えられるが、このアルコールは消費税を免除されていた。このため、虚偽の申告によってこうしたアルコールを入手し、それを国内向けの葡萄酒に添加することが行なわれていた (*L'économiste français*, 19 janvier, 1889, p. 78)。

(8) 葡萄酒関税は、それまで1 hl あたり一般関税で5.20フラン、協定関税で3.50フランであったが、1881年の関税改正及びその後の通商条約締結の中で、一般関税で4.50フラン、協定関税で2フランとなった。尚、協定関税とは、フランスと通商条約を結んでいる国からの輸入品に課されるものであり、通商条約を結んでいない国からの輸入品には一般関税が課された。

(9) フランスの葡萄酒関税は、アルコール含有度15度未満の葡萄酒を対象としていた。それ以上のアルコール含有度をもつ場合には、葡萄酒関税に比べて非常に高いアルコール関税を課された。

(10) ドイツからスペインへのアルコール輸出量は、1875年に82,000 hlであったが、1887年には1,088,000 hl にまで達した (Gide, *loc. cit.*)。

(11) Convert, F., “Histoire du vinage,” *Revue de viticulture*, t. XIX, 1903, p. 160.

(12) 1892年の関税改正において、葡萄酒関税には新しいシステムが取り入れられた。すなわち、1 hl の葡萄酒に対し、アルコール含有度1度につき一般関税で1.20 フラ

ン、最低関税で0.70フランの関税が課されることとなった (Golob, Eugene Owen, *The Méline Tariff: French Agriculture and Nationalist Economic Policy*, New York, 1944, p. 174 A)。

- (13) 例えば、1 hl の葡萄酒に対し、アルコール含有度1度につき1.25フランと価格が定められる。
- (14) Gide, Charles, “La crise du vin dans le Midi de la France,” *Revue d'économie politique*, t. XXI, juillet, 1907, p. 490.
- (15) Pech, Rémy, *Entreprise viticole et capitalisme en Languedoc-Roussillon du phylloxéra aux crises de mévente*, Toulouse, 1975, p. 114.
- (16) 以下、「葡萄酒」とは、1889年8月14日の法律によって定義されたものを意味する。
- (17) 1894年7月24日の法律。Warner, Charles K., *The Winegrowers of France and the Government since 1875*, New York, 1960, p. 40. この法律はヴィナージュを受けた葡萄酒の販売も禁じた (Convert, *op. cit.*, p. 197)。
- (18) 1900年12月29日の法律。この法律は、小売商の下での水増しを禁止する条項を有しているが、小売商を立入り検査から除外することにより、暗黙的に水増しを認めることとなった (De Romeuf, Louis, “La crise viticole du Midi,” *Revue politique et parlementaire*, t. LX, mai, 1909, p. 296)。
- (19) Laurent, *loc. cit.*
- (20) 1903年の11月に、水増しされた葡萄酒に関する裁判がナンシー (Nancy) で行なわれた。そこでの裁決は、1889年の法律により「水増しされた葡萄酒は葡萄酒ではないが、アルコールを含む飲料であるから、アルコールとして課税されるべきである」というものであった (Warner, *op. cit.*, p. 43)。
- (21) *sucrage en première cuvée*
- (22) *sucrage en deuxième cuvée*
- (23) 付加税を含めた額である。1887年5月27日の法律により、加糖用の砂糖に対する消費税は30フランとされた (付加税も含む)。Convert, F., “Histoire du sucrage des vins,” *Revue de viticulture*, t. XIX, 1903, p. 73.
- (24) 1885年7月22日の政令。Convert, *loc. cit.*
- (25) Convert, *op. cit.*, pp. 73-4. 約1.7 kg の砂糖から1ℓ のアルコールがつくられる。
- (26) 図3の数値は、加糖用として購入された砂糖に関するものである。葡萄酒価格が高騰していた際には、一般の砂糖も加糖に利用されたが、それは含まれていない。
- (27) 1891年7月11日の法律。Convert, *op. cit.*, p. 75.
- (28) 1889年8月14日に、当時の大蔵大臣ルヴィエ (Rouvier) は、その書簡の中で、第一回醸造分への加糖を受けた葡萄酒は自然葡萄酒としてみなされるべきであると述べている (Convert, *op. cit.*, p. 77)。
- (29) 1897年4月6日の法律。Convert, *op. cit.*, pp. 75-6.

(30) Convert, *op. cit.*, p. 78.

(31) 前掲の図3において示されているように、1900～2年に加糖用の砂糖消費量はかなり低い水準となったが、これは、1900年の法律よりも、1900年及び1901年の豊作によって葡萄酒価格が暴落し、加糖が採算にあわなかったことによるところが大きい。

(32) 19世紀末に、フランス、ドイツ及びオーストリーは、国内の甜菜糖の輸出先をめぐって争っていた。三国とも、国内の砂糖消費税を高くし、それを輸出助成金として用い、ダンピングを行なっていた。1901年10月以来、こうしたダンピング競争をとめるために、ブリュッセルで国際会議が開かれていたが、1902年3月5日に各国は協定を結び、輸出助成金を廃止することとなった。このため、砂糖に対する高い消費税は必要でなくなり、引き下げられたのである (Levasseur, Emile, *Histoire du commerce de la France*, Paris, 1912, t. 2, pp. 566-7)。

(33) Laurent, *op. cit.*, p. 392.

(34) 前掲の図3に示されている数値は、加糖用として購入された砂糖に関するものであり、1903年の法律から後述する1905年の法律に至る時期には、示されている数値以上の砂糖が利用され、示されている数値以上の葡萄酒がつくられていたと考えられる。

(35) Warner, *op. cit.*, p. 41.

(36) Bonnard, *op. cit.*, p. 45.

(37) 葡萄栽培の北限に近い地方では、アルコール含有度を引き上げるための加糖が必要であった。例えば、1906年に加糖に利用された砂糖の量は、ガール県で19トン、エロー県で3.5トン、オード県で2.8トンであったのに対し、コート・ドール県では869トンであった (Gide, “La crise du vin dans le Midi de la France,” p. 492)。

(38) Warner, *op. cit.*, p. 42.

(39) 1907年6月29日の法律。以下、この法律の内容については、*L'économiste français*, 6 juillet, 1907, pp. 12-3 による。

(40) Warner, *op. cit.*, p. 44.

(41) Warner, *loc. cit.*

(42) 南部葡萄栽培者総同盟は1907年9月22日に設立され、1912年までに、変造酒に関する1892件の訴訟を起した。その中で1409件が有罪とされた (Warner, *op. cit.*, p. 47)。

(43) 1909年に、南部葡萄栽培者総同盟は、プロヴァンス地方の葡萄栽培者をも傘下に入れ、南東部葡萄栽培者同盟 (Confédération des vignerons du Sud-Est) となる。また、ブルゴーニュ地方葡萄栽培団体同盟 (Confédération des associations viticoles de Bourgogne)、シャンパーニュ地方葡萄栽培組合連合会 (Fédération des syndicats de la Champagne viticole)、ジロンド県葡萄栽培者連盟 (Ligue des viticulteurs de la Gironde) 等が同様の活動を行なった (Warner, *op. cit.*, pp. 47-8)。

1981.10.2 脱稿

(後期課程第1年度生・経済史 増田富寿研究指導)